

2020年5月19日

ブルーバックス『カラー図解 分子レベルで見た薬の働き』の訂正とお詫び

2020年2月刊行『カラー図解 分子レベルで見た薬の働き』（平山令明著）に誤りがありましたので、ここに訂正してお詫びいたします。

p.22 l.13

(誤) まずその薬が働く相手の薬

(正) まずその薬が働く相手である薬

p.30 図 1-7 の説明に以下を追加

(b) では反平行の 2 本の β ストランドからなる 1 枚の β シートを示す。

p.31 l.6

(誤) 複数の二次構造の

(正) 複数の異なる二次構造

p.32 l.7

(誤) 管 (チューブ) で表す

(正) 管で表す

p.33 l.6

(誤) 二次構造が少数集まった構造が

(正) 二次構造が少数集まった特定の構造が

p.42 l.5

(誤) 重要な要素になる

(正) 重要な結合である

p.42 l.22

(誤) 生体高分子の多くは非常に

(正) 生体高分子は非常に

p.43 l.16

(誤) 細胞の約 70 % **が**水分子によって占められており

(正) 細胞の約 70 % **は**水分子によって占められており

p.51 l.10

(誤) 感染症にかかった**時の**イギリス首相

(正) 感染症にかかったイギリス首相

p.69 l.11

(誤) 1948 年にサルディーニア島の下水道**から**

(正) 1948 年にサルディーニア島の下水道**で**

p.108 l.25

(誤) 図の**左**下辺り

(正) 図の**右**下辺り

p.108 l.26

(誤) 図の**右**下側

(正) 図の**左**下側

p.109 l.4

(誤) **右**下の主溝に

(正) **左**下の主溝に

p.124 l.8

(誤) 小管が伸びたり縮んだりして

(正) **微**小管が伸びたり縮んだりして

p.177 l.13

(誤) **ペプチダーゼ**

(正) **プロテアーゼ**

p.193 l.5 以下の一文を削除

この図はちょうど、図 5-2 でのレニンの構造を左から見た様子になっている。

p.195 図 5-5 を以下の図に差し替え

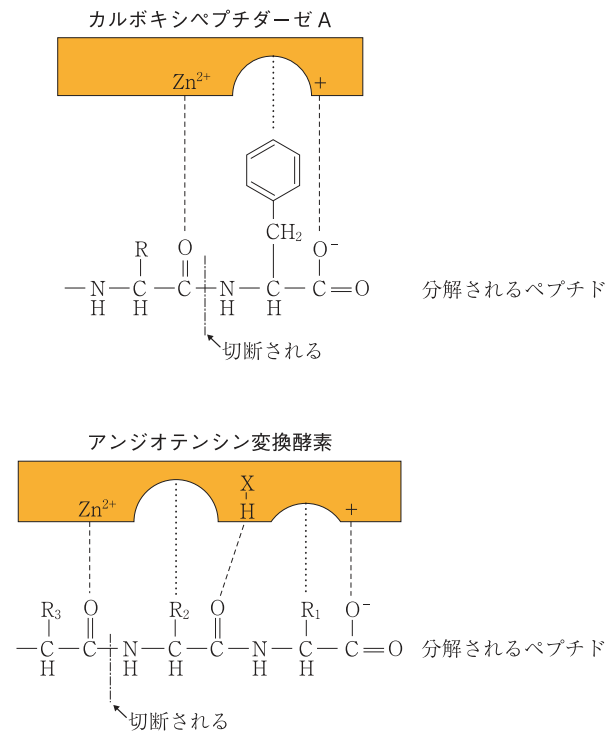


図5-5 カルボキシペプチダーゼ A とアンジオテンシン変換酵素の活性部位の比較 (模式図)

p.196 l.9

(誤) 水素結合および静電相互作用であり

(正) 静電相互作用および水素結合であり

p.212 l.20

(誤) ヒト由来の

(正) ヒトの

p.243 l.3

(誤) 免疫反応 (拒絶反応) が劇的に高まっている

(正) 免疫反応 (拒絶反応) が劇的に低下している

p.243 l.10

(誤) イノシン酸一リン酸

(正) イノシン一リン酸 (イノシン酸)

p.263 l.2

(誤) 逆に約

(正) 約

p.269 l.13

(誤) アンモニア基

(正) アンモニウム基

p.299 l.1

(誤)

本書に掲載した分子の立体構造の座標は、構造バイオインフォマティクス研究共同体～～～～サイトに入り、左頁の PDB コードを使えば、各構造の座標は誰でも自由に参照できる。

(正)

本書の中に現れる分子の立体構造の座標は、World Wide Protein Data Bank(wwPDB <https://www.wwpdb.org>) から公開されている。wwPDB はアメリカの Research Collaboratory for Structural Bioinformatics (RCSB)、ヨーロッパの Protein Data Bank in Europe (PDBe) および日本の Protein Data Bank Japan (PDBj) が母体になって運営されている。例えば、PDBj のサイト (<https://pdbj.org/>) に入り、左頁の PDB コードを使えば、各構造の座標は誰でも自由に参照できる。